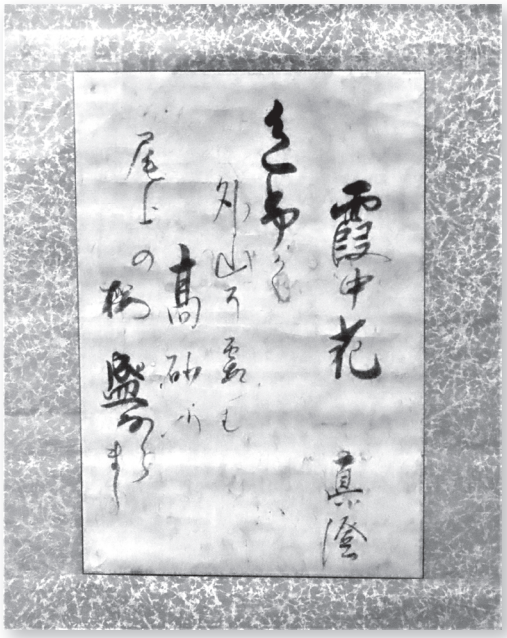
秋田県立博物館〈菅江真澄資料センター〉

真澄

No.40

MASUMI



企画展「深澤多市 －郷土研究と真澄研究の偉業－」展示資料より

【上】真澄自筆和歌「霞中花」・個人蔵

【下】日記《十曲湖》（戎谷南山模写）・個人蔵

「真澄」は、菅江真澄資料センターの活動を紹介する広報紙です。

第87回企画コーナー展

令和４年３月19日(土)
～５月15日(日)

真澄が暮らしたまち
－秋田市－

およそ四十六年間、各地を巡り歩き、旅に生きた真澄でしたが、中には数年に亘って長く滞在した土地もありました。じっくりと腰を据え、周辺の様子を記録したり、多くの人々と交流したりしながら、様々な著作を残しました。そうした土地の中から、今回は秋田市に焦点を当て、秋田市における真澄の足跡を辿り、真澄の残した著作の中からいくつかを抽出して展示紹介しました。

一つの場所に長く居たからこそ見聞できたこと、記録できたことが真澄にはあったのでしょう。そうした真澄の視点から浮かびあがる、真澄が暮らしたまち、当時の秋田市の姿に迫りました。（現在の地名で紹介しました）

❖秋田市への初来訪

真澄が初めて秋田市を訪れたのは、天明五年(１７８５)のことです。七月二十二日、秋田市川尻上野町にあった小夜庵に俳人・吉川五明（きっかわごめい）を訪ねています。そのことは『五明住所録』に「尾張駿河町白井英二医也」とあることから分かります。白井英二とは真澄の若年時の名乗りです。五明は与謝蕪村の蕉風俳諧を学び、秋田俳壇の全盛期を築いた人物です。その名を広く知られ、門弟が五百名いたとも言われています。真澄は後に、日記《ひなの遊び》や《男鹿の島風》の中で五明の句を取り上げています。

❖秋田市を再訪

次に真澄が秋田市を訪れたのは、享和元年(１８０１)のことです。初めての来訪から十六年の歳月が経っていました。十一月四日、青森県深浦町を出立し、八峰町から秋田県に入ります。そのまま南下し、十一月十三日、秋田市金足に入ります。その後土崎に移動し、一ヶ月あまりを過ごします。十二月中旬には、土崎を発ち、寺内、八橋を経て、秋田市街(久保田城下)に入ります。十二月二十九日には、保戸野通町で開かれていた「年の市」を見ています。

その後の数年間は、秋田県内の各地を旅して回り、時々は秋田市にも立ち寄っていたようです。文化元年(１８０４)八月十四日には、秋田市旭南にある応供寺を出立し、男鹿方面へ向かいます。八郎潟湖畔にて中秋の名月を眺める目的でした。

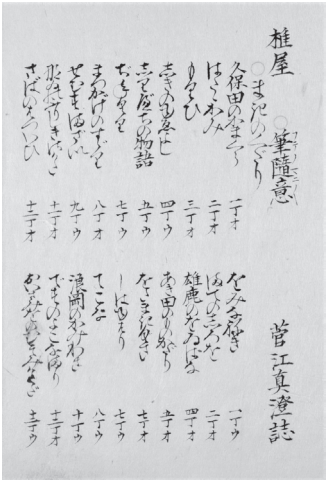
年の市で買い物をした人々(保戸野通町)
日記《雪の道奥雪の出羽路》・館蔵写本

❖金足・奈良家へ

文化八年(１８１１)三月、前年から過ごした男鹿市を出立し、秋田市金足へ。二十四、二十五日には、周辺で軒の山吹の風習を見ます。その後、一度男鹿市へ戻り、五月十二日、再び金足の奈良家を訪れ、秋田藩士・茂木知利（もてぎともとし）、那珂通博（なかみちひろ）らと顔を合わせます。男潟に面した奈良家別家へと移り、潟を眺めながら漢詩や和歌を詠み合いました。

❖秋田市での暮らし

文化八年の夏頃より、真澄は秋田市で暮らすことになります。以来、自身が留まり、書き物をした場所を総じて、書屋「椎ノ屋」と号し、《しののはぐさ》、《筆のまにまに》などといった随筆を多く書き始めます。



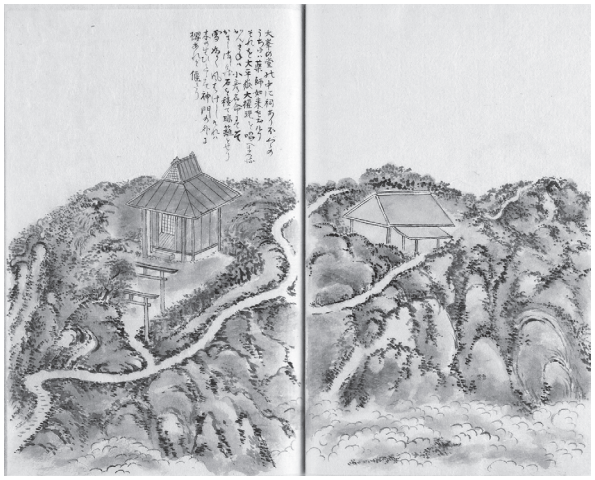
右上に「椎屋（しいのや）」の文字
随筆《筆のまにまに》・大館市立栗盛記念図書館蔵写本

❖勝手明神へ

文化八年八月十日、那珂通博らとともに、秋田市太平黒沢の勝手明神を目指し出立。手形、蛇野、広面、太平八田を経て、太平目長崎の嵯峨家に到着。小休憩した後、勝手明神へ。参拝後は太平山谷から河辺岩見へと進み、殿渕や伏伸の滝を見ます。

❖太平山登山

文化九年(１８１２)七月十六日、太平山山頂での月見を目的として寺内を出立。外旭川、濁川、添川、太平八田を経て、太平目長崎の嵯峨家に到着。十九日には、那珂通博、淀川盛品（もりただ）らが合流。太平寺庭、同黒沢、同山谷を経て、山頂を目指します。女人堂、剣岳、宝蔵岳、弟子還を経て山頂に到着。同行の人々と月見をし、和歌を詠み合います。山頂で一泊。翌二十日は別ルートで下山しました。



太平山山頂の様子
日記《月のおろちね》・館蔵写本

❖旭川の源流へ

文化十年(１８１３)の三月、秋田市を流れる旭川の源を尋ね、太平山麓の仁別周辺を探訪した真澄は、日記《あさひ川》を記したとされています。残念ながら同書は未発見のため、内容の詳細は不明。ただ、関連する内容を真澄は随筆《筆のまにまに》や《久保田の落ち穂》に載せており、そこには「旭川」の名付け親は真澄で、九代藩主・佐竹義和にもその名を気に入ってもらえたことが書かれています。

❖地誌作成への決意

文化十年の夏頃、真澄は秋田六郡の地誌作成のための企画書《花の出羽路の目》をまとめ、藩に提出します。藩からの正式な許可を待ちますが、実際に許可がおりて作成を始めるのは、それから十一年後の文政七年(１８２４)の八月、《雪の出羽路平鹿郡》からとなります。その間、地誌作成のための準備として、独自に、図絵集《勝地臨毫》や地誌習作の作成、現地調査の下調べなどに取り組みます。

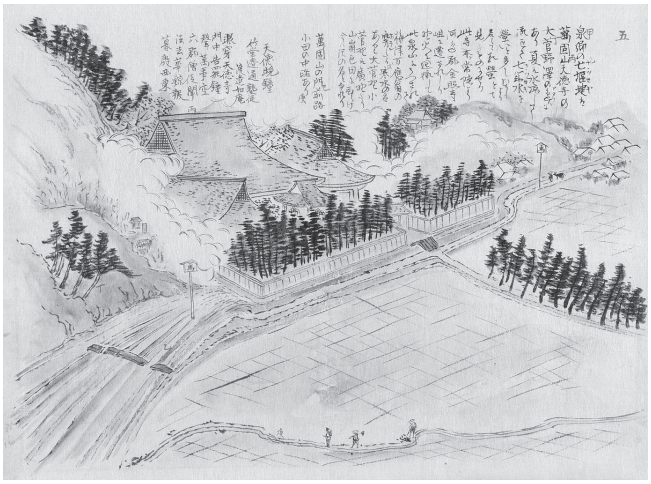
❖《勝地臨毫》の試み

文化十年、真澄は前年から準備していた草稿などを活用しながら、図絵集《勝地臨毫秋田郡》全四巻を作成します。久保田城下の図絵の作成は憚られたためか、郊外の山々や農村風景が多く描かれています。

また翌文化十一年(１８１４)から同十二年にかけては、地誌作成の取材のため雄勝郡(現湯沢市一帯)に滞在し、地誌草稿《雪の出羽路雄勝郡》や図絵集《勝地臨毫雄勝郡》をまとめます。また十二年の春頃、雄勝郡から秋田市に戻っていた真澄は、当時「河辺郡」であった秋田市牛島、仁井田、上北手、下北手の取材を行い、図絵集《勝地臨毫河辺郡》をまとめています。

❖和歌集の編纂

文化十四年(１８１７)の夏頃、是観(旭北寺町・本誓寺の十三世住職)と公教(同・西勝寺の僧)と真澄の三人で和歌を詠み合い、それらを集録して、和歌集《道の夏くさ》としてまとめました。

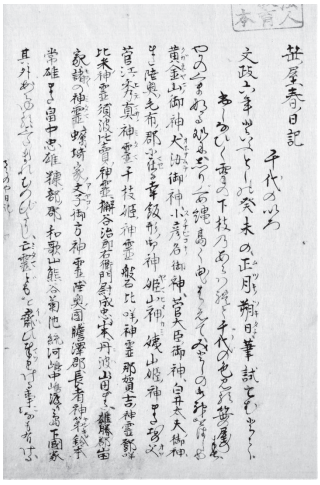


天徳寺の門前の様子(泉)
図絵集《勝地臨毫秋田郡一》・館蔵写本

❖度々の引っ越し

文政五年(１８２２)五月八日、長野町の小野寺氏宅に寄寓していた真澄のもとに越後の橘由之(良寛上人の弟)が訪ねてきます。長野町は現在の中通二丁目周辺。また七～八月頃、文化八年頃から書き始めていた随筆《久保田の落ち穂》の清書を小野寺氏宅にて行います。

八月、梅津宗家・中屋敷にある土屋琴斎宅に移り住みます。中屋敷があった場所は、後の室町、現在の旭南二丁目周辺です。また同年十一月十七日には、同・中屋敷の伊藤鶴斎宅に移ります。書屋を設け「笹ノ屋」と号し、執筆に励みます。



右上に「笹ノ屋春ノ日記」の文字
雑纂《筆のしがらみ》・大館市立栗盛記念図書館蔵

❖藩への著作献納

文政五年十二月、周囲の人々のすすめもあって、これまで書き溜めていた日記や図絵集、合わせて五十一冊を藩校明徳館に納めます。

❖永眠の地

文政十二年(１８２９)七月十九日、七十六歳で没。文政七年から、藩の正式な許可を得て本格的に地誌作成を進めていましたが、その調査中、仙北市田沢湖梅沢にて病に伏し、そこで亡くなったとも、また角館に移ってから亡くなったともいわれています。亡骸は友人たちによって運ばれ、秋田市寺内にある鎌田正家家の墓域に埋葬されました。天保三年（１８３２）、没後三年を迎えたことを契機に、親しく交流のあった鳥屋長秋を中心として真澄の墓碑が建立されます。真澄は今も秋田市に眠っています。

第88回企画コーナー展

雪の出羽路平鹿郡を読む ―第1期―

令和４年７月16日(土)
～９月４日(日)

真澄は文政七年から同十二年にかけて秋田藩内の地誌編纂に取り組みました。真澄にとってこの地誌編纂は、それまでの旅の中で得た知識や経験を十分に生かすことのできる集大成ともいえる事業でした。秋田六郡(雄勝郡・平鹿郡・仙北郡・河辺郡・秋田郡・山本郡)の中から、藩の援助を受けて正式に地誌編纂をスタートさせたのが《雪の出羽路平鹿郡》です。これは現在の横手市に関する内容を全十四巻にまとめた著作です。

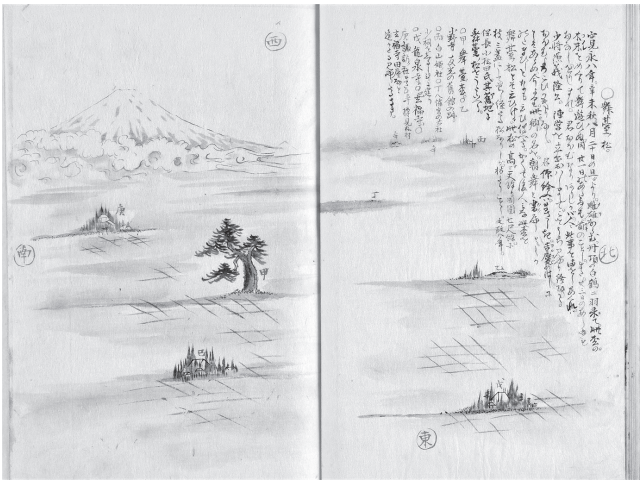
展示では同書の内容からいくつかを抽出して、第一期・第二期の二回に分けて紹介しました。第一期ではかつての横手・平鹿地域旧八市町村から、旧平鹿町・旧大雄村・旧横手市・旧山内村の四市町村を取り上げました。

■旧平鹿町

巻数	親郷	寄郷	肝煎名
⑦	下境	七日市	惣左衛門 市左衛門
⑧	浅舞	(浅舞)	小松田和兵衛
		樽見内	源蔵
		下鍋倉	甚四郎
		中吉田 東石塚	彦左ヱ門
		下吉田	宇太郎
⑩	増田	明沢	吉太郎 久右ヱ門
⑪	醍醐	(醍醐)	周助
		石成	吉郎兵衛
		馬鞍	与治兵衛
		下樋口	佐藤理右衛門
		深間内	治右衛門
		上吉田	庄右衛門
		客殿薊谷地	九郎左衛門
		上樋口	(仮)亦吉 (仮)八太郎

「舞台の松」(八巻より)

寛永八年(１６３１)、八月二十日の朝のことです。二羽の丹頂鶴がこの地に飛んできて、大きな松の周囲を舞ったといいます。この話を伝え聞いた二代藩主・佐竹義隆は吉兆の証だとし、当地の名を「朝舞」とするように命じました。旧平鹿町「浅舞」の地名由来にまつわる伝承です。二羽の鶴が周囲を舞ったと伝わる松は、「舞台の松」と呼ばれていましたが、真澄の来訪時にはすでに枯れていたため、図絵中央左手に大きく描かれている松は、真澄の想像図になります。



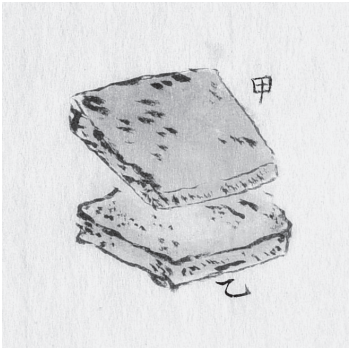
地誌《雪の出羽路平鹿郡八》・館蔵写本

■旧大雄村

巻数	親郷	寄郷	肝煎名
⑥	阿気	(阿気)	治左衛門
		平柳	彦左衛門
		宮田	兵四郎
⑦	下境	田村	与惣兵衛 喜助
		根田谷地	九重郎
		八柏	喜右衛門 甚六
		桜森	庄左衛門 五郎右ヱ門

「田村根子(ねっこ)」(七巻より)

旧大雄村田村周辺で採取され、家庭用燃料として使われていた根子(泥炭)の図絵。根子(泥炭)とは、枯死した水生植物やコケ類などが湿地や浅い沼に堆積し、ある程度分解した後、炭化したものを指します。黄褐色または褐色で、水分を含むため、乾燥させてからでないと燃料として用いることができませんでした。『大雄村史』によると、燃料の主流が石油になる昭和三十年代までは、同地区ではこの根子を燃料として使用していたといいます。〔甲〕が一番掘り、〔乙〕が二番掘りの根子。真澄は本文に一番掘りが出来の良い根子であると記しています。



地誌《雪の出羽路平鹿郡七》・館蔵写本より一部拡大

田村根子(実物)・館蔵

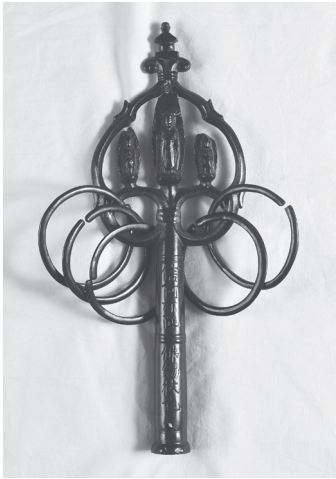
■旧横手市

巻数	親郷	寄郷	肝煎名
①	角間川	百万苅	九右衛門
		黒川	長兵衛
⑦	下境	(下境)	文七
		塚堀	助八
		清水町	藤七
		下八丁	利介
		赤川	三之助
		猪岡	
⑪	醍醐	新藤柳田	(仮)六左衛門
			(仮)松之助
		外ノ目	作兵衛
⑬⑫	横手町	(横手町)	加賀屋与郎
			河村市五郎
		大屋寺内	堀江平蔵
		大屋新町	六右衛門
		婦気大堤	小右衛門
		安田	利兵衛
		赤坂	勘介
		三本柳	市重郎
		八幡	新太郎
		静町	権兵衛
		上八丁	八右衛門
		上境	久太郎
		関根	松四郎
		三原	長左ヱ門
		明永野	六左衛門
		見入野新田	市郎兵衛
		杉沢	儀右衛門
		杉目	三之丞
		横手前郷	和三郎
		大沢	三右衛門

「大乗院の大錫杖（おおじょうじょう）」（十三巻より）

旧横手市寺町（現中央町）の大乗院が所蔵していた錫杖頭を真澄は図絵に描いています。当時、横手一郷の祈願所であった大乗院は明治三十六年には廃院となり、この錫杖頭は現在、横手神明社に奉納され、国の重要文化財に指定されています。正元元年（1259）の銘がある古いもので、真澄は右側の金輪（かん）（鐶）の一つが欠けているところまで細かく写しています。

地誌《雪の出羽路平鹿郡十三》・館蔵写本



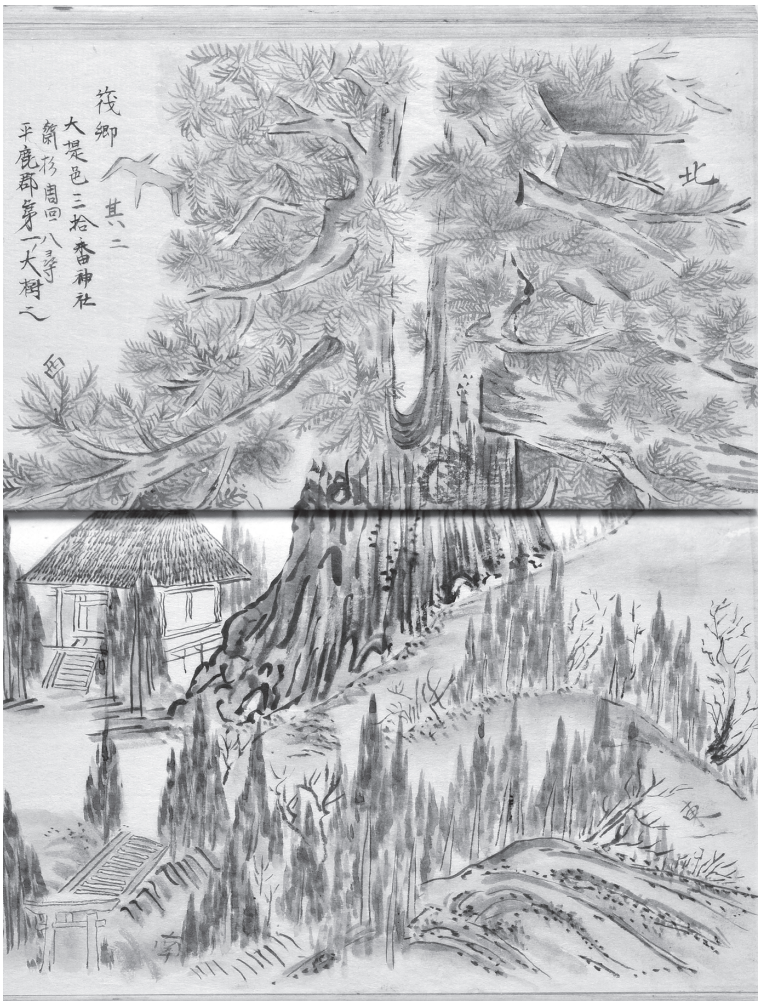
錫杖頭（複製）・原資料横手神明社蔵

■旧山内村

巻数	親郷	寄郷	肝煎名
⑭	横手山内	土淵	
		平野沢	
		筏	
		南郷	勘重郎
		三又	平吉
		黒沢	
		小松川	
		大松川	
		丹波開	

「筏（いかだ）の大杉」（十四巻より）

旧山内村筏にある比叡山神社（三十番神社）の御神木である大杉を描いた図絵。平鹿郡第一の大樹で、周囲八尋（約12メートル）余りの太さであると記されています。冊子の向きを九十度回転させて縦長の形式で図絵を描いたのは、2400余りある真澄の図絵のうち、日記《雪の秋田根》に描いた白糸の滝（現北秋田市森吉）と、本図だけです。



地誌《雪の出羽路平鹿郡十四》・館蔵写本

第88回企画コーナー展

雪の出羽路平鹿郡を読む ―第2期―

令和４年10月22日(土)
～12月11日(日)

第一期に続いて、地誌《雪の出羽路平鹿郡》に焦点を当てた展示を行いました。第二期ではかつての横手・平鹿地域旧八市町村から、旧雄物川町・旧大森町・旧十文字町・旧増田町の四町を取り上げ、同書の内容からいくつかを抽出して紹介しました。

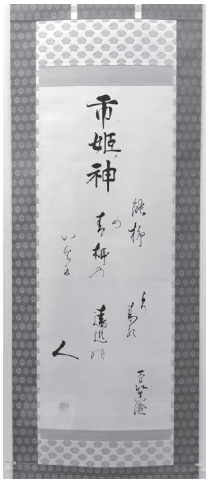
そもそも地誌とは、その土地の自然・歴史・文化などについて記述したものです。真澄は晩年、藩命の下、秋田六郡の地誌編纂に取り組みました。事前に藩に「企画書」を提出した真澄は、その中で地誌の題名にそれぞれ「雪・月・花」の名を冠することを決めています。文人らしい風雅な名付けです。完成本の形で藩に献納することができたのは《雪の出羽路平鹿郡》全十四巻のみでした。

■旧雄物川町

巻数	親郷	寄郷	肝煎名
②	沼館	(沼館)	治兵衛
		今宿	久兵衛
		矢神	円兵衛
		下河原	善治
		造山	久兵衛
		南形	七右衛門
		深井	(仮)亦右衛門
			(仮)清兵衛
		道地	善左衛門
		柏木	久三郎
		東里	市左衛門
		西石塚	三郎兵衛
③	八沢木	二井山	重吉
		薄井	太郎左衛門
⑥	阿気	小出	吉之助
		大塚	九左衛門
			佐多郎
⑧	浅舞	砂子田	三四郎
⑨	植田	西野	三郎兵衛
		常野	蔵松

「今宿（いまじゅく）の大柳（市神の柳）」（二巻より）

旧雄物川町今宿には、かつて五つの名所があったといいます。そのうちの一つが市神として祀られた大柳でした。正月九日の初市ではこの柳に神酒や供物を捧げてお参りしました。この柳のことを和歌に詠んだ真澄自筆の掛軸も残っています。この柳は、古くから幾たびも老いては倒れてきましたが、そのたびに蘖（ひこばえ）を芽吹かせて若返ったとされます。近年、倒木の危険を考慮して途中から切られ、往時の大柳の姿は見られなくなってしまいましたが、それでも、切株から若木が生えて育っています。今宿の柳は健在です。



「市姫の神」（複製）・原資料個人蔵

市姫の神の柳の青柳の
いとにより来る遠近の人　菅江真澄

（市神として祀られている柳は青々と茂り、まるで糸のようにしだれた枝の下には、あちらこちらから大勢の人が寄り集まってくる）

■旧大森村

巻数	親郷	寄郷	肝煎名
①	角間川	板井田	(仮)荘之助
			(仮)三郎右衛門
		松田新田	(仮)太右衛門
			(仮)与十郎
		袴形	(仮)甚三郎
			(仮)助重郎
		十日町	荘兵衛
⑤④③	八沢木	(八沢木)	角助
			七右衛門
		大森	太兵衛
		猿田	万右衛門
		上溝	伝左衛門
			伊右衛門

「阿弥陀三尊（あみださんぞん）板碑（いたび）」（三巻より）

真澄は旧大森町猿田・阿美多地（あみだち）集落の田の中から掘り出された板碑を図絵に描きました。中央に阿弥陀如来、向かって左下（右脇侍）に勢至菩薩、右下（左脇侍）に観音菩薩の構図となる阿弥陀三尊を刻んだ碑です。この板碑は現在、近隣の六盃沢（ろっぱいざわ）集落で大切に祀られていますが、碑面が摩滅しているため、その詳細を知る上で真澄の図絵が貴重な手がかりとなっています。

地誌《雪の出羽路平鹿郡三》・館蔵写本

阿弥陀三尊板碑拓本・館蔵

■旧十文字町

巻数	親郷	寄郷	肝煎名
⑧	浅舞	上鍋倉	喜左ヱ門
		十五野新田	治右ヱ門
		住吉荒田目	団助
		与作	権右衛門
⑨	植田	（植田）	荘兵衛
		越前	和兵衛
		海蔵院	八左衛門
		志摩新田	重兵衛
		今泉	茂右衛門
		下堀	吉右ヱ門
		真木	与治右ヱ門
		別明	伊兵衛（荘兵衛？） ※植田村の肝煎が兼ねる
		谷地新田	善左ヱ門 乙松
		源太左馬	与市郎
		木下	新助
		二井田	石川伊左衛門
		古内	長助
⑩	増田	新関	利左衛門
		新古内	仁兵衛
		腕越	市左衛門
⑪	醍醐	梨木羽場	三右衛門

ち、人が住み始め、文政八年（１８２５）には家が九軒になり、増田十文字村と呼ばれるようになりました。図絵中央、横の街道が羽州街道で左が湯沢、右が横手。縦の街道の下方向が増田、上が浅舞に通じています。

地誌《雪の出羽路平鹿郡十》・館蔵写本

「十文字村のはじまり」（十巻より）

現在の十文字駅付近は、もとは広野で、湯沢・横手・増田・浅舞に通じる道を行く人々はしばしば道に迷っていました。これを救済すべく、酒好きの妖怪、猩々（しょうじょう）の姿を模した道標を建てた人物がいました。増田・通覚寺十四世の天瑞（てんずい）和尚です。その広野に、文化十四年（１８１７）、一軒の家が建

猩々の道標（実物）
・横手市教育委員会蔵

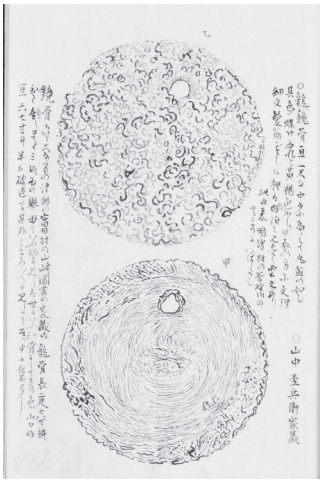
通覚寺発行の「猩々の道標」図・館蔵

■旧増田町

巻数	親郷	寄郷	肝煎名
⑩	増田	（増田）	伊太郎
		縫殿	又兵衛
		八木	勘兵衛
		上亀田	源兵衛
		下亀田	彦右衛門

「龍鏡骨」（十巻より）

真澄は「龍鏡骨」と呼ばれる直径三十cmほどの円型の物体を、増田村に住む山中杢（もく）兵衛（べえ）宅で見せてもらい図絵に描きました。図絵上部、物体の裏側には雲のような文様があります。図絵下部、表側には筋が細く付き、真ん中が盛り上がり、煤（すす）けたような色をしています。「龍の鏡骨」と呼ばれた理由は、大蛇の頭骨に付いていた、鏡の様をした肉だと考えられていたからですが、実際はサルノコシカケの一種です。この「龍鏡骨」を家に蔵しておけば、火災を避けることができると信じられていました。実物が現存し、横手市指定文化財になっています。



地誌《雪の出羽路平鹿郡十》・館蔵写本

表面

裏面

龍鏡骨（実物）・増田町文化財協会蔵

企画展

深澤多市

―郷土研究と真澄研究の偉業―

令和4年4月29日(金・祝)～7月3日(日)

大正後期から昭和初期にかけて活躍した郷土史家・深澤多市。その功績は、秋田県関係の古書を整理してまとめた『秋田叢書』の公刊などで知られています。何より『秋田叢書』には真澄の著作が多数収録され、その後の真澄研究の進展にも大きな影響を与えました。企画展では多市の郷土研究と真澄研究の足跡について、遺された多くの資料や刊行物などから紹介しました。

深澤多市と愛猫

展示構成

第1章　深澤多市の生涯
第2章　『秋田叢書』の出版
第3章　漢詩文の学び
第4章　官吏生活の中で
第5章　地域の研究
第6章　真澄全集編纂の試み

多市を模した中山人形(個人蔵)

秋田叢書の挿画に用いられた銅版
(秋田県立図書館蔵)

展示を終えて

◆今回の展示は、令和二年に多市のご子孫から多くの資料を寄贈していただいたことに端を発します。これらの資料は多市の逝去後、夫人から四代に亘って大切に保管されてきた資料です。そうした貴重な資料とともに、郷土の歴史を後世に守り伝えることに情熱を注いだ深澤多市という人物の半生について掘り下げて紹介することができました。

◆展示期間中、多くの方に足を運んでいただき、中には数時間かけて一つ一つの資料を熱心に見て行かれる方もいました。また多市の生まれ故郷である美郷町や、助役を務め、中山人形などの産業の発展に大きく尽力した横手市(多市が助役を務めたのは横手町の時)からは、地元の史談会や研究会の方々に団体で来館していただきました。今なお郷里の誇りとして敬われている多市の存在の大きさを改めて知ることができました。

◆現在、真澄研究に携わる多くの方が用いているテキストは、昭和46年から刊行され始めた、未来社の『菅江真澄全集』です。その底本の主となったのが『秋田叢書』でした。昭和初期に多市が『秋田叢書』を刊行していなければ、今日の真澄研究の発展はなかったと言っても過言ではないでしょう。『秋田叢書』の刊行には多くの苦労が伴い、最終的には多市自身が私財を投げうってまで成した一大事業でした。多市の努力に心から感服します。

編集後記(表紙解説も兼ねて)

郷土の偉人・深澤多市を取り上げた企画展を真澄部門で担当することになったのは、多市が編纂・発行した『秋田叢書』のなかに真澄の著作が多数含まれていたことが大きな理由の一つでした。真澄の著作が江戸時代の秋田の様子を知ることができる貴重な内容のものであったということはもちろん、多市自身、郷土研究を進める上で、真澄に影響を受けたことが多々あったのだろうと推測されます。表紙の資料２点は、企画展で紹介した資料です。【上】は真澄自筆の和歌軸装です。「霞中花」と題し「色ふかく外山に霞む高砂の尾上の桜盛ならまし」と詠んでいます。【下】は真澄の日記《十曲湖》を、多市と親交のあった画家・戎谷南山が模写したものです。いずれも多市の手元に置かれていた資料です。多市の傍らには、いつも真澄の存在がありました。(角崎)

真澄 No.40
MASUMI

発　行　日◎令和５年(2023)３月21日
編集・発行◎秋田県立博物館菅江真澄資料センター
〒010－0124　秋田市金足鳥崎字後山52
TEL.018－873－4121（代）